

発達障害に関する幼児の認識

筑波大学 水野 智美
富山大学 西館 有沙
筑波大学 徳田 克己

I. はじめに

近年、多くの幼稚園、保育所に発達障害のある子どもが在籍するようになってきている。発達障害のある子どもを担当する保育者は、その子どもの発達上の困難やニーズに応じた保育をすることに加えて、まわりの子どもたちに対する障害理解指導を行うことが求められている（徳田・田熊・水野，2010）。発達障害のある子どもは、まわりの子どもたちと同じように行動することができなかつたり、しようとしなないことがある。また、一見、風変わりとも思われる行動をとる。ただし、目に見える障害ではないため、周囲の子どもから「自分よりも劣った存在」「変な子」などとみなされたり、「わがままを言っている」ととらえられてしまう。周囲にこのようにとらえられることによって、発達障害のある子どもはまわりの子どもたちと良好な関係を築くことができず、いじめや阻害の対象になることがある。それを防ぐためにも、まわりの子どもに対する障害理解指導は不可欠なのである。

しかし、幼稚園や保育所の中で、まわりの子どもたちに対する障害理解指導をどのように実践すればよいのかについての研究や情報は非常に少ない。現在、報告されている研究は、発達障害のある子どもが在籍している園において、発達障害のある子どもについてまわりの子どもがどのように援助行動を起こしたか、あ

るいはどのような発言をしたかなどを紹介しているものがほとんどであり、発達障害に関する理解指導をどのように実践すればよいのかについて明らかにしたものはない。

これまでに、身体障害に関する理解指導の実践や研究は数多く行われてきた（徳田，1999；水野・徳田，2002；水野，2005a；水野，2005b；西館・徳田・水野，2005；西館・水野・徳田，2006；西館，2007；西館・藪波，2010 など）。なかでも、幼児に対する理解指導の研究として、水野・徳田（2002）は、車いすを使用する子どもが登場する絵本を幼児に読み聞かせることによって、幼児は車いすの子どもとどのように遊ぶことができるかを具体的に考えられるようになったことを報告している。また、水野（2005a）は、車いすを使用している人形を用いて、車いすの人はどのような生活をしているかを考えるような指導をしたところ、工夫をすれば車いすの人たちも自分たちと同じように活動することができることと幼児が認識できるようになったことを明らかにしている。ただし、身体障害に関する理解指導の方法をそのまま発達障害にあてはめることはできず、発達障害に特化した理解指導の方法を検討しなくてはならない。

発達障害に関する理解指導の研究が少ない理由の一つに、発達障害に関する認

識の構造が十分に明らかにされていないことが挙げられる。発達障害に関して教員を目指す学生や保育者、一般成人がどのようなイメージを持っているのかを明らかにした研究はあるが（生川・那須，2001；松山，2006；菊池，2011 など）、幼児や児童生徒の認識を明らかにした研究はない。

そこで、本研究では、今後、発達障害に関する理解指導を行うための基礎資料として、発達障害に関する幼児の認識を明らかにしたいと考えた。ただし、幼児は発達障害という概念を持っていない。また、発達障害の子どもの特性やニーズは幅が広く、さまざまである。さらに、具体的な状況を設定しなければ幼児はどのような子どもについて尋ねられているのかのイメージを持てず、答えられない。これらのことを考慮して、本研究では発達障害のある子どもが幼稚園や保育所で起こしやすい問題行動を取り上げ、それらの問題行動を示している子どもについて幼児がどのように認識するかを尋ねることにした。

II. 方法

1. 調査対象者

愛知県および茨城県の幼稚園（各1園）、沖縄県の保育所（1か所）に通っている年中児58名（男児30名、女児28名）、年長児62名（男児28名、女児34名）、計120名を調査対象とした。

2. 手続き

幼稚園および保育所に協力を依頼し、調査対象となる子どもを一人ずつ別室に呼び出し、個別ヒアリングを行った。調査では、紙芝居を用いて問題行動を起こしている子どもの状況を説明した上で質問をし、絵と文字による選択肢から回答するように促した。

調査にかかった時間は1人約15分であった。筆者らは自由保育の時間に子どもと一緒に遊んだり、保育活動に参加したりして、子どもとのラポールを形成した上で調査を行った。調査時期は、2010年12月～2011年2月であった。

3. 質問項目

以下に示す3場面について、それぞれ3項目、計9項目の質問を行った。

- ①外遊び終了時に保育者が部屋に入るように指示をしても保育者の指示に従わず、遊びを止めずにいる子どもを描いた場面
- ②子どもが常に自分の好きな絵本を独占し、他の子どもが貸してほしいと申し出ても貸そうとしない場面
- ③周囲の子どもたちが大きな声で歌う音が苦手であり、歌の時間が始まるとパニックになってしまう子どもの様子を描いた場面

①～③について、それぞれ1)自分のクラスにそのような行為をする子どもがいた場合に自分はどう接するか（「もし、〇ちゃん（回答者）のクラスに、紙芝居に出てきた△△ちゃん（発達障害のある子ども）のような子がいたら、〇ちゃんはその子にどうするかな」）、2)その行為をする子どもをどの程度、許容できるか（「△△ちゃんのような子がクラスにいても、全然気にしないかな、絶対にいやかな、少しがまんでできるかな」）、3)その行為をする子どもをどのように思うか（「△△ちゃんについて、どう思うかな。【イラストを提示しながら】『そんなことをすると先生が困る』と思うかな。『～はしなくてはいけないことである』と思うかな。『△△ちゃんはそれをしたくない気分だった』のかな。『自分も△△ちゃんのように、やりたくないと思うことがあって、△△ちゃんの気持ちわかる』と思ったかな）を尋ねた。

なお、状況を説明する際および質問をする際に、発達障害があると想定した子どもの名前と同じ名前の子どもがそれぞれの園に在籍していないことを確認した上で使用した。

Ⅲ. 結果と考察

1. 保育者の指示に従わない子どもに対する認識

保育者の指示に従わずに、外遊びを止められない子どもがクラスにいると想定し、自分はその子どもに対してどのように接するかを尋ねた(表1)。表1によると、年中児、年長児ともに「部屋に入るように誘う」と答えた者が多く(年中児:72%、年長児:55%)、特に年中児は年長児よりもそのように回答する者が多かった($\chi^2(1) = 3.99, p < 0.05$)。また、年長児は年中児に比べて「保育者に言う」と答える者が多くみられた($\chi^2(1) = 7.14, p < 0.01$)。「そっとしておく」という回答は年中児、年長児ともに少なかった(年中児:9%、年長児:7%)。

発達障害のある子どもが保育者の指示に従わない様子はしばしばみられる。しかし、周囲の子どもたちが部屋に入るように誘っても、発達障害のある子どもは

自分の気持ちをコントロールすることが苦手であったり、次の活動への見通しを持ってなかったりするために、その誘いに応じることはほとんどない。そうすると、子どもたちは発達障害のある子どもに対して、「誘ったのに言うことを聞いてくれない、嫌な子」というネガティブなイメージを持つことにつながってしまう。発達障害のある子どもが保育者の指示に従って部屋に入るためには、子ども同士が誘い合うのではなく、まずは発達障害のある子どもが部屋に入ろうとしない原因を保育者が見つけ、それに合わせた対応をすることが求められる。発達障害のある子どもに対して周囲の子どもたちがネガティブなイメージを持たないためには、「保育者に言う」「そっとしておく」ことが望ましい。年長児は「自分が誘っても解決につながらない」と判断したために、年中児よりも「部屋に入るように誘う」と答えた割合が少なかったと考えられる。

また、このような行動をする子どもをどの程度、許容できるかを「全然気にしない」「少しがまんできる」「絶対にいやだ」の3件法で回答を求めたところ(表2)、「全然気にしない」と答えた年中児は51%であったのに対して、年長児は18%

表1. 保育者の指示に従わない子どもに対して自分はどのように接するか
(選択式・複数回答)

	年中児	年長児	χ^2 値 (Fisher)
部屋に入るように誘う	72% (42名)	55% (34名)	3.99*
保育者に言う	16% (9名)	37% (23名)	7.14**
そっとしておく	9% (5名)	7% (4名)	*0.46
自分も同じようにする	2% (1名)	0	*0.48

* : $p < 0.01$ * : $p < 0.05$

* : Fisher 直接確率計算を用いたことを示す

%の母数は、年中児 57名、年長児 61名

であった。「少しがまんできる」と答えた年中児は39%、年長児63%であった。 χ^2 検定の結果、1%水準で有意な差が認められ ($\chi^2(1) = 14.65, p < 0.01$)、年長児の方が許容できない傾向があることを確認した。

さらに、保育者の指示に従わない子どもをどのように思うかを尋ねたところ(表3)、年中児も年長児も「その子どもが保育者の指示に従わないと保育者が困る」と答えた者が最も多く、年長児の方が有意に高い傾向がみられた(年中児:33%、年長児:47%; $\chi^2(1) = 2.45, p < 0.10$)。加えて、「保育者の指示は聞くべきである」を選択した割合は、年中児よりも年長児の方が有意に高かった(年中児:17%、年長児:34%; $\chi^2(1) = 4.33, p < 0.05$)。これらのことから、年長

児は「先生(保育者)を困らせるのはよくないことである」という認識と「指示には従うべきである」という規範意識から保育者の指示に従わない子どもに対して許容できない傾向にあると考えられる。

2. こだわり行動のある子どもに対する認識

好きな絵本をいつも独り占めして、「貸して」と言われても応じようとしない子どもが自分のクラスにいと想定し、自分はその子どもに対してどのように接するかを尋ねた結果を表4に示した。表4によると、年中児、年長児ともに「一緒に読もうと誘う」と答えた者が8割以上であり(年中児:81%、年長児:81%)、「そっとしておく」と回答した者は少なかった(年中児:5%、年長児:2%)。「絵本を独り占めする」という行為は、「クラ

表2. 保育者の指示に従わない子どもを許容できるか(選択式)

	年中児	年長児	χ^2 値
全然気にしない	51% (29名)	18% (11名)	14.65**
少しがまんできる	39% (22名)	63% (39名)	
絶対にいやだ	10% (6名)	19% (12名)	

** : $p < 0.01$

%の母数は、年中児57名、年長児61名

表3. 保育者の指示に従わない子どもをどのように思うか(選択式)

	年中児	年長児	χ^2 値
その子どもが保育者の指示に従わないと保育者が困る	33% (19名)	47% (29名)	2.45†
その子どもは、部屋に入りたくない気分だったのではないかと思う	29% (17名)	23% (14名)	0.71
自分も指示に従いたくないと感じる経験があり、その子どもに同感できる	28% (16名)	15% (9名)	3.11†
保育者の指示は聞くべきである	17% (10名)	34% (21名)	4.33*

* : $p < 0.05$ † : $p < 0.10$

%の母数は、年中児57名、年長児61名

スにあるものはみんなで使わなくてはならない」というルールを破っているだけでなく、周囲の子どもに「自分も使用したいのに使うことができない」という不公平感を持たせることにもなる。

このようなこだわり行動のある子どもをどの程度、許容できるかを尋ねたところ（表 5）、「全然気にしない」は年中児 45%、年長児 24%、「絶対にいやだ」は年中児 7%、年長児 16%であり、保育者の指示に従わない子どもに対する認識と同様に、年長児の方が許容できない傾向があった。

さらに、こだわり行動のある子どもをどのように思うかを尋ねたところ（表 6）、「自分も友だちに貸したくないと感じる経験があり、その子どもに同感できる」と回答した割合は年中児の方が有意に高かった（年中児：43%、年長児：18%； $\chi^2(1) = 9.18, p < 0.01$ ）。一方、年長児は年中児よりも「絵本はみんなで使うべきで

ある」と答える割合が高い傾向にあった（年中児：22%、年長児：36%； $\chi^2(1) = 2.48, p < 0.10$ ）。年中児は「自分も絵本や玩具を独占することがある」という経験からこだわり行動を示す子どもを許容する気持ちにつながったと思われる。しかし、年長児は自分自身が「独占したい」という気持ちがあるものの、「みんなで使わなくてはならない」というルールを守っているために、それをできない子どもを許容できなくなっていると考えられる。

3. パニックを起こす子どもに対する認識

みんなで歌を歌う時間が嫌いで、その活動が始まるとパニックを起こして、泣き叫んでしまう子どもが自分のクラスにいと想定し、自分はその子どもに対してどのような接するかを尋ねた（表 7）。表 7 によると、「一緒に歌うように誘う」と答えた者が年中児、年長児ともに最も多

表 4. こだわり行動のある子どもに対して自分はどのように接するか
(選択式・複数回答)

	年中児	年長児	χ^2 値 (Fisher)
一緒に読もうと誘う	81% (47名)	81% (50名)	0.01
保育者に言う	14% (8名)	23% (14名)	1.55
そっとしておく	5% (3名)	2% (1名)	*0.29

* : Fisher直接確率計算を用いたことを示す
%の母数は、年中児 57名、年長児 61名

表 5. こだわり行動のある子どもを許容できるか (選択式)

	年中児	年長児	χ^2 値
全然気にしない	45% (26名)	24% (15名)	6.64*
少しがまんできる	48% (28名)	60% (37名)	
絶対にいやだ	7% (4名)	16% (10名)	

* : $p < 0.05$

%の母数は、年中児 57名、年長児 61名

表 6. こだわり行動のある子どもをどのように思うか（選択式）

	年中児	年長児	χ^2 値
自分も友だちに貸したくないと感じる経験があり、その子どもに同感できる	43% (25名)	18% (11名)	9.18**
その子どもは、友だちに貸したくない気分だったのではないかと思う	31% (18名)	26% (16名)	0.41
その子どもが独り占めしていると、保育者が困る	29% (17名)	31% (19名)	0.03
絵本はみんなで使うべきである	22% (13名)	36% (22名)	2.48†

** : $p < 0.01$ † : $p < 0.10$

％の母数は、年中児 57名、年長児 61名

く（年中児：69％、年長児：74％）、「そっとしておく」と答えた者は少なかった（年中児：10％、年長児：2％）。パニックを起こした子どもに対しては、周囲が声をかけたり、なだめたりするのではなく、刺激の少ない場所に連れて行き、本人の気持ちが静まるまで待つことが必要である。保育者がこのことを知って、適切に対応していれば、子どもたちも保育者をモデルとして、「一緒に歌うように誘う」という行為ではなく、「そっとしておく」ことができるであろう。現状では、パニックになっている子どもを見たことがなかったり、パニックになる子どもがいたとしても、保育者が適切に対応していないために、子どもたちも「誘う」ことが望ましい行動であると考えられる。

嫌いな活動をする際にパニックを起こす子どもについてどの程度、許容できるかを尋ねたところ（表 8）、「全然気にしない」と答えた年長児は 31％であり、「保育者の指示に従わない子ども」（年長児：18％）や「こだわり行動のある子ども」（年長児：24％）よりも許容している割合が高かった。また、年中児と年長児との間に有意な差は認められなかった（ $\chi^2(1) = 1.54$ ）。

さらに、パニックを起こす子どもをどのように思うかを尋ねたところ（表 9）、年長児は「嫌いな活動でも我慢してやるべきである」と答えた者が最も多く、年中児よりも 5％水準で有意に高かった（年中児：21％、年長児：39％； $\chi^2(1) = 4.63, p < 0.05$ ）。また、年長児は「その子どもが泣いていると保育者が困る」と回答する割合も高かった（年中児：26％、年長児：36％）。一方、年中児は「自分も嫌いなことをやりたくないと思う経験があり、その子どもに同感できる」と答えた割合が年長児よりも高い傾向にあった（年中児：24％、年長児：11％； $\chi^2(1) = 3.43, p < 0.1$ ）。パニックを起こす子どもについても、年中児は自分もそのような経験があると同感し、年長児は「嫌なことでもやるべきである」という規範を意識した回答であった。

IV. まとめ

本調査の結果より、問題行動を起こす子どもについて、年中児よりも年長児の方が許容できない傾向があることが確認された。その背景には、年長児は「保育者の指示には従わなくてはならない」「絵本や玩具はみんなで使用するべきである」

表 7. パニックを起こす子どもに対して自分はどのように接するか (選択式・複数回答)

	年中児	年長児	χ^2 値 (Fisher)
一緒に歌うように誘う	69% (40名)	74% (46名)	0.41
先生に言う	21% (12名)	26% (16名)	0.44
そっとしておく	10% (6名)	2% (1名)	※0.46

※: Fisher直接確率計算を用いたことを示す

%の母数は、年中児 57名、年長児 61名

表 8. パニックを起こす子どもを許容できるか (選択式)

	年中児	年長児	χ^2 値
全然気にしない	41% (24名)	31% (19名)	1.54
少しがまんできる	50% (29名)	58% (36名)	
絶対にいやだ	9% (5名)	11% (7名)	

%の母数は、年中児 57名、年長児 61名

表 9. パニックを起こす子どもをどう思うか (選択式)

	年中児	年長児	χ^2 値
その子どもは、歌が嫌いだったと思う	34% (20名)	27% (17名)	0.71
その子どもが泣いていると保育者が困る	26% (15名)	36% (22名)	1.31
自分も嫌いなことをやりたくないと思う	24% (14名)	11% (7名)	3.43†
経験があり、その子どもに同感できる 嫌いな活動でも我慢してやるべきである	21% (12名)	39% (24名)	4.63*

*: $p < 0.05$ †: $p < 0.10$

%の母数は、年中児 57名、年長児 61名

などの園の中の規範を守ろうとする意識が働いていることが示唆された。

また、年中児が年長児よりも問題行動を起こす子どもについて寛容であったのは、自分自身もその子どもと同様のことをしてしまっているために、いけないことであると言い切れない気持ちがあったためであると思われる。滝吉・田中(2011)は、障害者の苦手さや振る舞いを理解するためには、自分自身の苦手さや振る舞いと対比させることの必要性を述べている。幼児においても、発達障害のある子

どもと自分との共通性を見出すことが理解を促進する際に重要になると思われる。

さらに、「問題行動をする子どもがいると保育者が困る」と感じる子どもが多いことを確認した。発達障害のある子どもの保育に必要な知識と技術が保育者に十分に備わっていれば、発達障害のある子どもは問題行動を軽減し、また保育者も保育場面で困ることは少なくなる。子どもたちは、「保育者を困らせるようなことをすると、保育者がかわいそうである」という意識から、問題行動をする子ども

に寛容になれないことが推測される。これらのことから、保育者が発達障害のある子どもに関する知識と技術を向上させることによって、発達障害のある子どもに対する寛容度を高めることができると思われる。

加えて、問題行動を起こす子どもに対して、年中児も年長児も一緒にやるように誘ったり手を貸すようにしたいと考えていることが確認できた。これは、幼児は相手が困っているときにはそのような行為をすることが望ましいと学習しているためであろう。しかし、発達障害のある子どもに対しては、誘ったり手を貸したりすることだけが望ましい対応ではない。むしろ、それによって問題行動を起こす子どもを「自分よりも能力の劣っている子ども」と見なしたり、年下扱いすることにもつながる。今後、障害理解指導において、発達障害のある子どもに対して、どのように接することが望ましいかを具体的に伝えていくことが求められる。同時に、保育者が問題行動を起こす子どもに適切に対応することによって、子どもたちは保育者をモデルとして関わり方を学んでいくことができると思われる。

今後は、学齢期以降の子どもの発達障害に関する認識を調べ、発達的な変化の様相を見ていくとともに、発達障害の理解指導プログラムを試作したい。

文献

- 菊池哲平（2011）教育学部学生における発達障害のイメージ・接触経験・知識との関連－，熊本大学教育実践研究，28，57-63.
- 松山郁夫（2006）軽度発達障害幼児期の不適応行動に対する保育士の認識，佐賀大学文化教育学部研究論文集，11（1），

123-131.

- 水野智美（2005a）人形遊びを通じた障害理解指導の効果－車いすの人形を用いた遊びの観察を通して－，障害理解研究，7，1-6.
- 水野智美（2005b）絵本『さっちゃんのみほうのて』を用いた読み聞かせによる幼児の障害理解の効果，読書科学，48（1），1-11.
- 水野智美・徳田克己（2002）幼児における絵本を用いた障害理解指導の効果－車いすの子どもが登場する絵本を用いて－，読書科学，46（4），147-155.
- 生川善雄・那須理絵（2001）知的障害者に対する大学生の態度構造－専攻、性と関連づけての検討－，東海大学健康科学部紀要，7，45-52.
- 西館有沙（2007）肢体不自由者の交通バリアフリーに関する子どもの認識とその発達的变化，障害理解研究，9，71-81.
- 西館有沙・水野智美・徳田克己（2006）肢体不自由者の交通バリアフリーのための教育のニーズに関する調査研究－交通バリアフリー教育と交通サバイバル教育について－，障害理解研究，8，1-10.
- 西館有沙・徳田克己・水野智美（2005）小学校及び中学校において実践されている交通バリアフリー教育，障害理解研究，7，27-34.
- 西館有沙・藪波真理子（2010）視覚障害理解を目的とした授業の実践・効果的な障害理解教育モデルの構築のために－，富山大学人間発達科学部付実践総合センター紀要，4，107-115.
- 滝吉美知香・田中真理（2011）発達障害者とともに生きる「ナチュラルサポーター」の育成を目指して－思春期・青年期の定型発達者における発達障害および自己に対する理解の変化－，東北

大学大学院教育学研究科研究年報, 59
(2), 167-192.
徳田克己 (1999) 日本における全盲者の
交通安全, 視覚障害者の交通安全のた

めの国際学術セミナー誌, 1, 12-18.
徳田克己・田熊立・水野智美編著 (2010)
『気になる子どもの保育ガイドブッ
ク』, 福村出版.

Children's Awareness of Developmental Disabilities

The objective of this research was to clarify children's awareness of developmental disabilities. Specifically, we asked healthy children how they understand the problem behavior that are common among children with developmental disabilities (disobey their teachers and continue playing, do not share their favorite book, and cream when they have to start an activity that they do not like).

The research subject was 58 second year students, and 62 third year students. The method was to conduct individual interviews. The problem behaviors were explained in a picture story show. The answers were provided in documents with illustration and writing. The children selected the answers.

The result showed that the third year students are less tolerant of children who display problem behaviors than second year students. It suggested the background factor that the third year students are aware of the school rules such as "we must follow the teacher's direction" and "we must share books and toys with everyone". It also suggested that the reason the second year students are more tolerant of children who display problem behavior is that it is related to the fact that they remember experiencing similar situations.